

半世紀にわたる「問題」を、いま問い直す。

不登校 50年

証言プロジェクト

#12 無着成恭さん

学校基本調査で「学校嫌い」の統計が開始されたのは1966年。今年はそれから50年にあたります。学校を長期欠席する子どもは、学校制度とともに常にいました。しかし、現在につながる「問題」として不登校が社会現象化してきたのは、この統計開始以降とも言えます。この50年、不登校は「問題」であり続けてきました。それは、学校、教育行政、精神科医療、家族のあり方、働き方などが、さまざまに問われてきた「問題」だったと言えます。この50年は学校に行かない子どもたちにとって受難の歴史だった一方、親の会やフリースクールなどの市民運動が立ち現れてもきました。いったい「不登校50年」の歴史は何を語るのでしょうか。不登校をめぐる、時代ごとにどんな状況があり、どのように問題とされ、どう対応されてきたのでしょうか。

不登校新聞社では、「不登校50年」を機に、証言プロジェクトを開始し、不登校経験者、親、親の会、居場所・フリースクール、医者、教員、学者、弁護士など、さまざまな関係者の生の声を集め、アーカイブにしていきます。インタビュー・寄稿は、社会的意義を考え、購読者に限定したのではなく、無料で公開します。そのため、プロジェクトは、寄付によって運営します。ぜひ、このプロジェクトへのご支援・ご協力をよろしく願います。

2016年7月15日 全国不登校新聞社

プロジェクトチーム（統括：山下耕平）

関東チーム委員：奥地主子、木村砂織、朝倉景樹、石林正男、加藤敦也、佐藤信一、須永祐慈、関川ゆう子、野村芳美、藤田岳幸、前北海、増田良枝、松島裕之、山口幸子
関西チーム委員：山下耕平、石川良子、貴戸理恵、栗田隆子、田中佑弥、山田潤

#12 無着成恭さん



(むちゃく・せいきょう) 1927年、山形県沢泉寺の長男として生まれ、跡継ぎとして育てられる。山形師範学校に進み、1948年、21歳で同県山元村中学校に赴任。戦後の民主主義教育の実践として展開した「生活綴方」は、後に『山びこ学校』として出版され（現在は岩波文庫所収）、大きな反響を呼んだ。1952年、沢泉寺住職に。1954年に上京し駒澤大学仏教学部に学び卒業。私立明星学園教諭を経て、千葉県香取郡の福泉寺、大分県国東市の泉福寺住職を歴任。1964年からはTBSラジオ「全国こども電話相談室」の名物回答者として33年間出演した。

インタビュー日時：2016年10月30日

聞き手：奥地圭子

場所：無着さんご自宅マンションの共同図書室（大分県別府市）

写真撮影：木村砂織

奥地 こんにちは、おひさしぶりです。

無着 奥地さんは、私と出会ったところと比べて、ずいぶん貫禄がよくなりましたね、顔に。

奥地 そりゃあ、そうですね。だって40年以上経っていますよ（笑）。

子ども電話相談室で

無着 その本（『TBSラジオ全国こども電話相談室』、読んでくれた？）

奥地 読みました。おもしろかったです。私が知っている無着さんと変わらないなあと思って。

無着 その昔、奥地さんにも出演してもらいましたね。子ども電話相談室に現場の教師を入れたので紹介してくれと言われて、30人ぐらい紹介したんだけどさ、みんなマイクの前に立って、質問になったら、ふるえ

あがってしゃべれないのよ。堂々としゃべったのは、奥地さんだけでね。この人なかなかやるなあと思いますよ。

奥地 おもしろかったですね。「馬の顔は、なんで長いんですか」とか、珍問の連続で。無着さんは33年間、回答者を務められたんですね。

無着 番組開始から33年間やりました。1987年にお寺の住職になってからは、お葬式やなんかあったら、行けなくなってますね。1997年に放送が日曜日になったので辞めたんですが、俺が受けた最後の質問は、「仏様と神様では、どちらがえらいんですか？」という質問でした。

奥地 それで「神様にはお経がなくて、仏様にはお経があるから仏様のほうがえらいのです」と（笑）。

無着 そうそう。それから、「私のおちんちんは、小さいんだけど、こんな小さいおちんちんでも子どもを

つくることはできるでしょうか」とかね。それで、「いざとなったら、大丈夫だから」とか（笑）。

奥地 子どもたちに非常に人気のある番組でしたね。ラジオの前に、私は明星学園^{＊1}の教育研究会に毎月参加していたので、そこで知り合ったのが最初だったかと思います。

無着 そうでしたね。いろいろ質問したり、発言したりしておられて、この人は大丈夫かもしれないと思って、推薦したんだ。だから、明星に来なければ、ご縁がなかったんだよ。

奥地 その後、私は教師を辞めて、いろいろな人のご縁もあって、1985年にフリースクール東京シューレをつくったんです。それで、フリースクールでお寺の体験をやりたいと思って、無着さんに電話したんです。そうしたら、「弁当は持つてくるな」とおっしゃっ

＊1 1924年に大正自由教育運動の流れを汲み、創立された私立学校。現在は小学校、中学校、高校がある。所在地は東京都三鷹市。

として就いて、毎日、顔を合わせるように仕組んだわけ。だって、子どもの顔を見られない先生なんてね、そんな私の性格に合わない。だから、教頭を10年間やったんですが、ずっと副担任をさせてもらったんです（笑）。学籍簿をつくったり、めんどうなことはぜんぶ担任にまかせて、副担任は、生徒をちゃんと、掌の上に乗つける。その連中は、いまでも集まってくるからね。わざわざ大分まで来てさ。担任より、副担任のほうに来ちゃう（笑）。佃恵は、その最後の生徒だね。

子ども時代は

奥地 それだけ、魅力があったのでしょうか。ところで、無着さんは何歳になられましたでしょうか。

無着 妊娠からですか、生まれたときからですか？

奥地 仏教って、おなかの中にいるのを1年と数えるんですかね。あれはすばらしい発想ですよ。命としてもう存在しているんだから。じゃあ、それを含めて、

て。ここで作ったものを食べて、お箸もお茶碗も、ぜんぶ自分でつくるんだと。2回ほど、20〜30人の子どもたちと行かせていただきましたが、雑巾がけとか、竹から箸をつくったりとか、いろんな体験をさせていただきました。

今日、別府にいられたのも、ご縁のおかげです。いま、東京シューレに来ている子どものお母さんが、明星学園での無着先生の最後の教え子だったんですね。佃恵さん（現在は木下恵さん）ですが、その方から無着さんが別府にいらっしやることを教えていただきました。

無着 だから10円より5円を大事にしないとね（笑）。5円は真ん中に穴が空いているから、ひもで結べるでしょう（笑）。

学校ではね、校長とか教頭になるとクラスを持ってなくなるでしょう。でも、俺は自分の受け持った子どもがかわいくてね、校長とか教頭にはなりたくなかったの。でも、そういうわけにもいなくて、教頭は引き受けたんだけど、新卒の先生の担任のところに副担任

無着 お腹の中で約1年間育てられてから、出てくるんだから、ちゃんとお母さんのおなかの中で育てられた時間も年齢に数えなくちゃいけないということは、お経に書いてあるんです。その数え方で言うと、いま90歳です。

奥地 すごいですね、長生きですね。

無着 はーって、長息（笑）。

奥地 なるほど（笑）。お生まれはどちらで？

無着 山形県南村山郡本沢村のお寺の家に生まれたんです。非常に貧しいお寺でしたから、母親は学校の先生をしていました。ところが、ある日、干していた私のおむつが、こたつに落ちこちて火がついて、お寺が全焼してしまっただけです。学校とお寺は歩いて30分くらいの距離だったんですが、学校からは見える場所にあつて、燃えているのが見えて、母親は裸足で駆け出

ちだけは、ありました。

国の部品だった

奥地 戦争中は、兵隊さんには行かれてないんですよ。学徒動員で、ゼロ戦や戦闘機をつくっていた中島飛行機（群馬県）に行かれていたとか。

無着 中島飛行機の工場に、昭和19年（1944年）の7月から動員されました。中島飛行機はゼロ戦のほかにも、銀河という双発爆撃機なんかをつくってました。私は、銀河とゼロ戦の油圧パイプをつくらされてました。最初は、油圧パイプをくねくね上手に曲げることができなくてね。だんだん、熟練工になってきて、カッカッと曲げては出していました。

昭和19年の11月ごろ、秋晴れのいい天気のとときに、B29がゆうゆうと飛んで来たんです。きれいだったですよ。1万メートルの上空を飛んできてね。でも、我々のところは爆弾も何も落とさなかった。だから、空襲警報が鳴って、防空壕に入られて言われても、入らな

して行ったそうです。総代さん（檀家の代表）が尽力してくれて、お寺は再建できました。母親も、月給をぜんぶお寺の再建に出したからね。もう再建できないだろうと言われたのに、全焼して1年半後には、立派なお寺ができちゃったの。

その総代さんが、子守もしてくれていて、桑を摘む「はげご」という薬で編んだ背負子^{せおこ}で、俺を背負ってくれてたんです。いまは背負子もぜんぶ商品になってますけどね。

奥地 無着さんの子ども時代、学校はどんな感じだったんでしよう？

無着 学校で、「ワタシタチハテンノウヘイカノコドモデス」と教えられたの。それを家に帰って父に言ったら、「テンノウヘイカモホトケノコデス」と教えられたの。それで私は「学校では親子だけど、家に帰れば兄弟なんだ!!」と思ったんですね。あとは、そんなに深い印象はないですね。ただ、学校を休むと遅れるという気持ちはあったから、休みたくないという気持

いで眺めていたんです。

奥地 軍事工場は狙われそうなものですけどね。

無着 そのころは航空写真を撮って調べていたのでしょう。^{＊2}

奥地 どういう気持ちで爆撃機をつくっていたのですか。

無着 いや、爆撃機をつくるという意識は、ないですね。パイプを曲げるという意識しかなかった。これが、飛行機などの部分に使われるかなんて、考えたこともなかったです。

奥地 そういうものかもしれませんね。

無着 部品ですから。だって、人間自体が日本という

*2 編集部注：その後、昭和20年2月以降に何度か空襲を受けて中島飛行機の工場は破壊されている。

国の部品だったわけですから。

奥地 なるほど。そのころは何歳ですか。

無着 17歳ぐらいですね。旧制中学5年生でした。昭和20年3月に旧制中学を卒業したんですが、お寺の跡継ぎだから、卒業後は駒澤大学に行くように言われてたんです。でも、文科系だと招集を受けて兵隊に行かなくちゃいけないでしょう。まだ戦争は終わってなかったですからね。それで、山形師範学校に進学したんです。学徒出陣を免れられるのは、医学系と高等工業学校と師範学校系統だけでした。お寺だから、生き残ったとしても役に立つとか、いろいろ考えてね。そりゃあ、みんないろいろ考えたんですよ。

つまり、医学も、工業も、師範学校（教員を養成する学校）も、日本の軍国主義国家をつくるための重要な役割を果たしていたわけです。

奥地 戦争が必要とするものをつくるということですよ。

ね。師範学校では、少国民教育^{*3}をしつかりやる教員を養成するということですね。

先生は軍国主義の手先

無着 そうです。日本の教育者というのは、国家権力を握っている人の理想を実現する教育しかできない。現在の日本の学校だって、自民党の権力の下に学校が支配されているから同じです。日本の学校教育というのは、そのときの権力者が、国民を利用できるように教育するわけです。

山形師範学校の学生も、卒業すれば山形32連隊に召集されていました。最低の二等卒から始まって、3カ月経つと伍長になって、兵隊を10人ぐらいあずかるようになる。だから、学校の先生というのはね、軍国主義教育の手先だった。

奥地 敗戦の日のことを覚えておられますか。

*3 年少の皇国民。銃後に位置する子どもを指した語。

かんべえ」って具合でした。

8月6日に広島に原子爆弾が落ちたときも、8月7日か8日の山形新聞に「熱線利用の爆弾」と書いてあってね。「原子爆弾」とは書いてなかった。だって、当時はわかんなかったですからね。「熱線利用の爆弾って、すごいんだってさ」「いやあ、こりゃ大変だよ。こんなのなら、熱くてしょうがないだろうなあ」なんて、言い合ってたの。

奥地 だんだん本当に負けたんだとわかってくるわけですよ。

無着 漢文の教師が「要するに負けたらしい」「自分の家に帰れ」という。負けたんだからね。海側の人は、まだ帰りやすかった。でも、内陸の人は月山^{がっさん}という山を越えて帰らないといけない。漢文の教師いわく、鉄道もアメリカ軍に抑えられるかもしれないから、内陸の人は山を越えて行かなくちゃならないと。だから「一晩山の中で野宿しないと帰れないなあ」なんて話してました。我々は山一つ越えれば行けるところだったん

無着 覚えてます。8月15日は羽黒山の山中にいました。日本は石油がないので、飛行機を飛ばすために松の根っこを蒸して油を採ってたんです。その松の根っこを掘るために、羽黒山の山中に動員されてたんです。その管理をしていたのは海軍でした。山麓の手向村^{とうげむら}から5キロほど山道を登ったところで、松の根を掘っていたら、玉音放送があるから12時までには社務所まで戻って来いと言われたんです。「天皇陛下が放送するんだってさ」「何だろうね、がんばれってことじゃないの」なんて話しながら、山から降りてきました。

でもね、ラジオを聞いていても「耐えがたきを耐え、忍び難きを忍び」しかわからない。「耐えがたきを耐え、忍び難きを忍び」戦争しろって言ってるのかな、いや、負けたって言ってんじゃねえのって、わかんないわけだ。そうしたら、教師が「戦争は終わりだ。負けたんだ」と言い出した。それで私は「ああ、終わったのか。山から降りてくるときにシャベルを持ってくるんだ。また、取りに行かなくちゃ。失敗したなあ」と思ってた。でも、泣いている人もいてね。「おまえ、何泣いているの?」「いや、負けたからだよ」「そりゃあ、な

ですが、米沢の人はもう一山越さないといけない。「それは大変だなあ」とね。でも、汽車は動いているというところで、午前2時か3時に起きて、荷物背負って駅まで20キロぐらい歩いて、汽車で家に帰りました。

奥地 それはたいへんでしたね。

無着 寺に帰ると、伯父(母親の兄)が憲兵に捕まったとのことでした。坊さんなのに、村に男がいなかったから村会議長になっていて、8月1日の村会で「アメリカ軍が日本に入ってきたときは、子どもを隠さなくちゃだめだ、男はみんな殺される」と話したそうです。それを密告されて、翌日には憲兵たちが来て、牢屋にぶち込まれてしまった。戦争に負けるって、見える人には見えていたわけですね。

「山びこ学校」ができたのは

奥地 戦争後、教員になられたのは?

無着 昭和23年（1948年）4月から、地元の山元中学校に赴任しました。

奥地 そこで、のちに有名になる「山びこ学校」^{*4}の実践に取り組みましたね。

無着 そうです。

奥地 一方的に教えるのではなくて、子どもの生活から学びとって、それを書きつづっていくという「山びこ学校」の発想は、どこからお考えになったものだったのでしょうか。

無着 それは、須藤克三先生のおかげです。敗戦後、

*4 山形県山元村（現在は上山市）の山元中学校の教員だった無着成森さんが、教え子の中学生たちの生活記録をまとめて、1951年に刊行した書籍（青銅社）。現在は岩波文庫所収。舞台となった山元中学校は2009年3月に廃校となった。

*5（すずき・みつぞう 1906—1992）…日本の教育者・児童文学者。山形県出身。教員、編集者を経て山形新聞社論説委員など。農村村へ深く関わりながら、教育文化運動の実践に力を注いだ。

奥地 それも、ご縁ですね。須藤先生と出会って、心を動かされたから実践されたということですよ。

無着 とにかく、おもしろかったのよ。村山俊太郎^{*6}とか国分一太郎^{*8}のように牢屋にぶち込まれた先生もいたとかね。須藤先生から聞いて初めて知ったことがたくさんありました。

奥地 そうすると、現場の先生として教壇に立つまでに、教師になったら、こういうことをやりたいなというイメージがおありだったわけですね。

無着 ええ。生活綴方で自分たちの生活を書かせなくちゃということ、徹底して言われてましたからね。

*7（むらやま・としたろう 1905—1948）…教育運動家。山形県の小学校教員となり、教育労働者組合を結成して検挙された。1940年には、生活綴方運動を理由に治安維持法で検挙されている。

*8（こくぶん・いちたろう 1911—1985）…日本の教育実践家、児童文学者で綴方教育の実践家・理論家だった。1941年に治安維持法により検挙された。戦後は、日本作文の会などの民間教育研究団体や新日本文学会などで活動した。

師範学校でも、先生たちは何を教えたらいいかわからないという状況があったわけです。それで、山形新聞の社説を読んだらおもしろくて、その社説を書いたのが須藤克三先生だったんです。小学館の編集もしていた人ですが、そのころは山形新聞の論説委員をしていた。それで、新聞社に遊びに行っただけで、学校に行っただけで、何も教わるものがないんですからね。

そして、私は師範学校1年生のときに生徒会の文化部長になったんですが、生徒で講座をつくりたいと学校に申し入れて、須藤克三先生の講座を開いたんです。そこで初めて、須藤克三先生から、鈴木三重吉^{*9}という人物や大正デモクラシーのことを教わったのです。そこで、生活綴方運動^{つづりかた}のことも出てきたんです。ですから、須藤克三先生と出会わなかったならば、あるいは、私が師範学校に入って文化部長になってなければ、「山びこ学校」はなかったと思います。

*6（すずき・みえきち 1882—1936）…広島県広島市出身の小説家・児童文学者。日本の児童文化運動の父とされる。

どういうふうにかかせれば、書かせたことになるのかというのが、師範学校の学生だった俺にとっては問題でした。もともと専門は数学だったですからね。頭の中は理科系なんですよ。

奥地 大田堯^{たかし}先生（教育学者／本プロジェクトインタビュー#05参照）が「山びこ学校」をすごく高く評価していました。教育って、戦後になっても、上から国が教える内容を伝達していくようなものが主流ですよ。でも、「山びこ学校」では、子どものほうから出発していた。子どもの現実とか生活とか、子どものなかにあるものを引き出していく。それから子どもどうして関わっていく。それがすばらしい、そういうものこそ学びだとおっしゃっていました。

自分たちの問題から社会を

無着 そうですか、ありがとうございます。私の考えとしては、子どもたち自身がどういふ問題を抱えているのか、自分の抱えている問題がいつか日本の中で

はどういう意味を持っているのか、人類史のなかではどういう意味を持っているのか、それを考えさせるところから始めれば良いという思いでした。

奥地 生活のことを書くだけではなく、そういった広い学びをやってこそ、自分の問題が見えてくるということですね。

無着 そりゃ誰しも、自分の問題、目先の問題は小さな問題だと思ってるわけです。その小さな問題が、実は全体のなかでどういう意味を持っているのかというところがわからなければ、行動は起きてこない。

奥地 そういう意味では、大きい学びというか、深い学びを追求されていたわけですね。

無着 まあ追求といっても、俺もいい加減だからね。

奥地 子どもたちといっしょに考えていったということですかね。

それから、私は駒澤大学に入ったんです。学問よりも先にそういう経験を積んで、大学に入ったので、大層も非常におもしろかった。とくに仏教史がおもしろかったですね。「ああ、宗教ってそうなのか」とか、先生たちの話に、いちいちうなずくことがあった。だから大学には入ったほうがいいですよ。かならずしも高校を卒業してすぐさま行くんじゃないですね。何年かいろんなことを経験してから行くかいいと思います。

奥地 不登校の子どものなかにも、そういう生き方をしている子がいます。自分は、学校が好きじゃない。それで、中卒で働くんだけど、やっぱり知りたいことがある。いろいろ出てきて、それから大学に入る。高認試験を受けて大学に入るとか、それがよかったと言っている子がいるので、まったくそうだなと思いますね。

無着 だから、そういうシステムを日本がちゃんと認めてくれないとね。なんでもストレートに行った人がいいんじゃないかね。竹だって、ところどころ節がないと、丈夫じゃないんですよ。尺八だって節があるか

無着 そうだね。子どもたちは「何でこうなの？」と聞いてくる。子どもが書いたことをそのまま謄写版で刷って渡してね、みんなで討論する。そうすると、わからないところはみんなに意見を言われますからね。最初はみんな短い文章なんですけど、それがだんだんだんだん、ふくらんでいく。子ども自身が書いたものが教材になったということが、山びこ学校の原点でしょうね。

奥地 山元中学校で生活綴方教育をなさっていたのは、何年間ぐらいですか。

無着 6年間です。師範学校に入ったら、義務として3年間は先生をしなくちゃいけないので教員になったんですが、私はお寺を継がなきゃならなかったんです。だけど学校がおもしろくなってね、あと3年、教師をさせてくれて、親父に頼んだんです。それで6年間。世間ではクビになったように言われましたが、実際はそういう事情です。

ら、いい音が出るんだ。

長期欠席の子どもは

奥地 山元中学で教員をされていたとき、長期欠席の子はいましたか？

無着 いたよ。働かせられるから長期欠席してたね。そこでうちのクラスでは、みんなで仕事を手伝って、学校に来られるようにしてあげたものだから、休む子はいなくなった。

奥地 なるほど。そのころは、いまの登校拒否や不登校のような子は見かけたことはなかったということですね。

無着 そうです。

奥地 駒澤大学を卒業後は、お寺を継がれたということですか。

無着 昭和27年から沢泉寺の住職をしたんです。ところが、親父が兄さんの子どもを弟子にして、「おまえは自由にしてい」と。それでやっつと、昭和33年、お寺の鎖から解き放たれて、髪の毛を伸ばしました(笑)。

奥地 それで、選んだのが教員の仕事だったんですか。

無着 いや、その前に、いろんなことがありましたね。ひとつには、お寺に生まれた赤松俊子さん(丸木位里さんと結婚して丸木俊子さんになりました)が、原爆の凶を描いて、丸木美術館を立ち上げるといふ話が持ち上がって、美術館を建てるための事務局長に俺が選ばれたんですよ。

奥地 そうだったんですか。知らなかったです。

無着 でもね、美術館の事務局長は、俺がやりたい仕事とちよつとちがうなと思つてたんです。俺は、今でもそうだけど、根っからが子どもと同じでしょ。発想

明星学園の実践が土台になっているのですね。どういふ実践だったんでしょうか。

無着 たとえば、小学校1年生の教科書で最初に出会う文字は、「はい」と「せんせい」です。「はい」は問題ないんだけど、「せんせい」は「せんせー」と言うでしょう。「い」とは読まない。1年生を担当した先生から、俺が質問されてね。「せんせい」を「せんせえ」と読むのはどうですか、と聞かれてね、「はあ、それは大問題だな」と。

それから、日本語の音声教育とか、発音、ふりがなを考え出したんです。「時計」も「とけい」と書く子と「とけえ」と書く子がいる。「とけえ」や「とけー」をまぢがいだとしていいのかどうか。あるいは、「ていねい」と書いて「てえねえ」と読む。「ねいさん」と書いて「ねえさん」と読む。もちろん、そこで悩まない教師もいます。でも、それがなぜかを子どもにわからせない、教えたことにならないんじゃないかと思つたんです。ですから、何を教えたら教えたことになるのかということが、明星学園では重要なテーマになりました。

や喜び方がね。建物を建てたり、美術館の館長というのは似合わない。そこに、明星学園の方から手伝つてくれないかという話があつてね。子どもといつしよに遊んでいたほうがいいんだ、やっぱり。子どもが掌のなかにいるというのは、うれしいことですからね。明星学園の校長から「人からこういうことを教えるかと言われたことを教えるのはダメなんだ。何を教えるかというのを、自分で考えなきゃ教育者じゃないんだ」と言われてね。「おつ、いいこと言うなあ、この校長」と思つてね。そんな言葉に、こちよこちよつとくすぐられて、「はい、わかりました」って返事をしたんです。

明星学園で「続山びこ学校」

奥地 それで、明星学園に赴任されたんですね。何年のことでしょうか？

無着 昭和31年、1956年ですね。

奥地 それで、『続山びこ学校』が出ますよね。あれは、

奥地 それで、そういう問題に取り組む研究会をつくられたわけですね。

無着 あなたが明星学園に来られるようになったのは、そのころですね。

奥地 はい。そして雑誌『ひと』を出されるようになるんですね。私も、『ひと』の編集のお手伝いをしばらくやりました。当時の明星学園は、ほかの学校とちがつて、教材を自分たちでつくつてましたね。教師言葉で言うところの自主編成ですね。

無着 そうそう、教科書もね。

奥地 国が決めた指導要領に沿うのではなくて、ゼロから自分たちでつくり出すんだという意気込みで、いろいろ研究したり、実践したりしてましたよね。当時、私は一般の学校の教師だったんですが、明星学園に魅力を感じて研究会に参加していました。その後、明

星学園とは深い関わりがありました。うちの子どもが不登校して小学校高学年は休んでいたのですが、明星学園から出ていた本を子どもが読んで、ここだったら行きたいと言ったんです。それで入学したんですが、そのころ、明星学園はだんだん曲がり角にきていましたね。明星学園のなかでも「受験派」と言いますか、とにかく点数を上げていい学校へ行かせようという親や教師の人たちと、本来の人間教育をやるべきだという人たちが、そうとう採めていましたね。

そこから、別に新しい学校をつくるべきだという話を持ち上がって、自由の森学園をつくる流れもあって、PTA総会が大変でしたよね。そういうことを糾弾されたりしていました。

無着 問題が起きたしたのは昭和50年代で、私は、昭和48年から教頭をやって、昭和59年に退職しているんです。そのころ、遠藤豊^{*9}たちが、自由の森学園をつくると言い出した。でも、俺は「もう学校をつくるこ

*9 (えんどう・ゆたか)・1925年栃木県生まれ。明星学園教師を経て、全人教育を行う自由の森学園を設立。

の森学園をつくるるとき、遠藤豊に頼まれて埼玉県知事と会ったりしてたからね。遠藤豊や松井幹夫^{*10}は、明星学園を出て、俺もいっしょに自由の森学園に行くと思ってたと思います。でも、俺は「学校はもういいよ。わかった」って。お寺のほうがずつといいって思ってたね。だって、死んだ人が相手だもの。生きている人が相手だとね、めんどろくさくて。死んだ人はね、なんでも俺の言うこと聞くんだけ。「あら、シンデレラ」ってね(笑)。

奥地 明星学園では、不登校の子はいましたか？ うちの子は、中学校で明星学園に行って、高校も明星に行って生徒会の活動をしていたりしたんですが、学校が荒れていたり、教師にもがっかりしたりして、結局は中退したんです。そのころは学校の雰囲気も、本で読んだような実践とは変わってきているので、私もちょっとがっかりしました。それと、不登校だった子

*10 (まつい・みきお) 1927-2012...1959年明星学園の教師に。数学教育協議会の中心的メンバーとして活動。95〜97年自由の森学園学園長。

とからは抜けるよ」と。同じことを繰り返すだけだったね。それで、成田空港のそばの空き寺に入って住職になったんです。

学校はもういいよ

奥地 自由の森学園と東京シューレは、同じ1985年に始まったんです。東京シューレのことを考えているときに、自由の森学園の小学校を千葉につくらないかという話が来たので、私もちょっと悩んだんですね。いい学校をつくりたいという思いと、不登校のことを考えて、学校以外の場があるんじゃないかという思いのあいだで、ちょっと悩んだんですが、いい学校をつくる運動をしている人は、ほかにいませんね。学校以外の場をつくるというのは、まだ本当に誰もやっていなくて、私はそつちをやったほうがいいと思って、教師を辞めて東京シューレを立ち上げました。

無着 ちょうどあなたがシューレのほうに頭が行ったころ、俺も学校はこれで卒業だと思ってました。自由が、うち以外にも、行っていたんですね。一般の学校は、もうイヤとか合わないとか。明星だったら、子ども一人ひとりの個性を大事にしたり、子どもの声を聴いてくれるからということ。だから、不登校の子が、かなりいたと思うのですけれど、ご記憶にありますか？

無着 公立の学校になじまないということでも来ていた子が、私のクラスにもいました。でも明星には、みんな喜んで来ていましたよ。だから、私のクラスにいた子どもで学校に来たくないという子は、いなかったですね。クラス全体が、ダジャレの連発ですからね。

奥地 なるほど。楽しい雰囲気があるいろいろあったでしょうからね。

無着 でもね、中学生ぐらいで雑巾の絞り方もわからない子もいたからね。「おまえら、勉強なんかしなくたっていいから、雑巾というのは、こういうふうにざぶざぶと洗ってキュッと絞るんだ」ってところから教えないといけなかった。拭き方もなくなってね。お

母さんが拭いてくれるらしくって、「おまえらテープルの拭き方も教わってないのか」ってね。俺がそこから教えた子どもたちは、いまでも会いに来ます。「おまえら、飛行機賃まで出して、わざわざ俺に会いに来なくていいじゃないか」って言うと、「いや、無着先生と会わないと死にきれないから」とか言ってるんだよ（笑）。

不登校するのは おもしろくないから

奥地 日本では、1970年代からどんどん不登校が増えるんですね。無着さんから見ると、どうして日本の学校は不登校をたくさん出したのだと思われませんか。

無着 日本の義務教育では、操作的知識だけで詰め込んで内部構造を見せないからでしょうね。『おっぱい教育論』（無着成森／どう出版2016）に書いたように、シナメクジに塩をかけるとちぢむ」ということは教えるが、なぜちぢむのかを教えないからでしょう。

奥地 そういう授業が、もう、なくなっちゃいましたね。いまの教育のあり方が変わらないと、不登校の状況も変わらないだろうということですね。

無着 そうですね。きわめて悲劇的なことですけれども、文部省、国家の側が子どもたちを自分たちの思いどおりの人間につくりあげようとするシステムがあるかぎり、登校拒否は、増えてくるでしょうね。だから、そういう意味では、日本の教育システム、教育者のレベルは、世界のなかでは、非常に低いのでしょうかね。

奥地 日本の教育制度は、政府が決めた学習指導要領でやる学校のみを正規に認めて、私たちがやっているようなフリースクールとか、シユタイナー教育、モンテッソーリ教育などには、何の応援もしないし、予算もつかず、正規の学校じゃないということで、らち外にされてきたんですね。

私たちは、政府が用意する学校も当然あって活用すればいいけれども、ほかの多様な教育も認めてくださーいと言ってきたんです。多様な教育を選べるのがいい

奥地 そうですね。

無着 学校の教師も、教えられる内容も、おもしろくない。それは明快でしょう。どういうことに子どもが問題意識を持っているかを教師は考えなければ、子どもはついてこないですよ。だって、子どもはおもしろいですよ。たとえば、お母さんが赤ちゃんにオッパイを飲ますときに乳首からおっぱいが出るでしょう。それで「おっぱいの乳首に穴が何個あいているんですか」という質問をしてくるんだから。教師が「おっ、いい質問だ」とか「わかんないよ」とか言うと、みんながわあっと笑うでしょ。そうやって、みんなしてしゃべってみようとなって、わあっと集まってやりました。

それで、クラスの子のなかに、お母さんに「ちよっとおっぱい見せて」って言った子がいてね。そのお母さんから「無着先生、何を教えてるんですか？ 娘が虫メガネを持って、おっぱい見せてと追いかけてくるんです」って（笑）。あのころは、俺も副担任だったから自由だね。

んじゃないかということ、ずいぶん動いてきて、最近、ちよっと変わり目にあるぐらいのところ。政府の用意した学校だけが正規の教育で、学校へ行けなくなったら学校へ戻さなきゃというような考え方をしてきた国って、北朝鮮と日本ぐらいと言われてるんですね。ほかの国々は、政府の用意した学校教育もあるけれども、ホームエデュケーションも含めて、ほかの教育方法でもいいことになっている国が多い。そういう意味では、日本は非常に遅れているんですね。

無着 北欧3国と言われているスウェーデン、ノルウェー、デンマークなどでは、教師自身が何を教えたくて、どういう子どもを育てたいのかという考えがないと、教師になれないんですね。

奥地 教師の主体性ですよ。

教師の条件は

無着 北欧では、人間として幅広く豊かであるという

のが教師の条件です。だから、学校の教師は尊敬されている。日本の教師は、先生あがりというのはいままで使いたくはないでしょう。俺も先生あがりだから言ってもいいでしょうけれども。なぜかと言うと、やっぱり視野狭窄なんですよ。日本が減びるとしたら、日本の教育が視野狭窄になっていることが大きな原因になるでしょうね。

江戸時代には、文部省なんてなかったんですよ。徳川幕府は、各藩が自分の藩の子弟を教育するには、藩校が責任を持たなければいけないと考えていた。教育を中央政府が監視してないわけです。江戸時代では、佐賀藩が一番教育のシステムが進んでいて、米沢藩がそれを見習って続いていた。

明治政府は薩長がつくって、総理大臣やなんかは薩長がとつたけれども、実質の部署には佐賀藩出身が一番多いんじゃないですかね。

奥地 佐賀藩や米沢藩は、どう進んでいたんですか。

無着 自由だったんですね。藩の教育というのは、儒

の木の枝に神様が降りてくるわけ。だから、日本では神社に松の木を植えないといけないのです。日本の神様には、松の木に神様を降ろす祝詞と、神様を松の木から天に昇らせる祝詞の二つしかないのです。

そして明治維新では、天皇を絶対的な神様にするために、仏教から天皇家を切り離したんです。そもそも日本に仏教を持ち込んだというのは、天皇家なんですけどね。日本が仏教国になったというのも、天皇家のおかげなんです。ところが、その天皇家と仏教を切り離して天皇を生き神様にした。しかし、お経がないんです。お経がないので、仕方なしに教育勅語をつくった。そして、廃仏毀釈運動が起こる。これは、すさまじい運動だったわけです。廃仏毀釈運動は、明治の慟哭と言ってね。日本はこれで滅びると書いた本がたくさんあります。そういうことを、ほとんどの方は知らないわけです。つまり、明治維新以後、このスイッチを押せばあの蛍光灯がともる、ということは教えるが、クラクリはすべて壁の中に隠されているわけです。

奥地 戦争が終わって、民主主義教育となっても、そ

教ですから。儒教というのは、宗教ではないということになっているけれども、世界的に孔子や孟子の教えというのは、本になっていて、教えた人がちゃんというでしょう。仏教も、お経という本があって、教えた人がお釈迦様となっているでしょう。教えた人がいて、教えた本があるというのは、これは世界宗教になりうるわけです。NHK朝の連続テレビ小説「あさが来た」に出てきた大阪の商人たちも、寺子屋ですから仏教の系統で教育されていた。江戸時代は明治以後の学校教育とちがって、生徒に点数をつけてなかったんですね。

奥地 なるほど、寺ですものね。

「お経」がない日本

無着 それに対して日本の神様というのは、お経がないんです。神主はいるけど、「おーおーおー」なんて言ってね。空から神様を松の木の枝に降ろして、地面に降ろしてくるといふ所作しかないわけです。だから、歌舞伎なんかでも松の木の枝が書いてあるでしょう。松

この部分はあまり変わらなかったと感じておられるわけですね。

無着 そうそう。日本の教育風土というのは、「なぜ」という内部構造については教えないで、操作的な知識と技術を教えることに終始しているんですね。

知識とはいかなるものか

奥地 いま、無着さんから見て、日本の教育がもっとこうなつたらいいと思っておられることを教えてください。

無着 教師自身が、北欧やアメリカで子どもをどう教育しているのかを学ばないといけないですよ。知人がアメリカ人と結婚した人がいるんですが、その子どもが日本の国籍を取るとき、日本の上智大学に行ったんですが、「日本の学生って、つまんない。話に幅がないの」「日本に来て失望した」と言っていました。

奥地 そうでしようね。でも、それはどこから来ると
 思いますか。

無着 日本のテスト体制も問題ですけども、知識と
 いうものは何なのかというこの哲学が不足している
 んじゃないでしょうか。知識がいかなるものかという
 哲学がないと言っていると思います。この『おっぱい
 教育論』なんか読むと、そのところがハッキリしま
 すよ。

TBSで子ども電話相談室をやっているとき、NH
 Kが見学に来ていたんですが、NHKラジオでは、い
 まも子ども科学相談室をやっているでしょう。でも、
 聴いていると、回答者がすぐに質問に答えているんで
 すよね。たとえば、「ナメクジに塩を振りかけるとち
 ぢむと聞いたんだけど、それなら砂糖をかけるとふく
 らみますか?」というような質問が来るでしょう。俺
 だったらね、「なぜ砂糖をかけたらふくらむって考え
 たの」って聞くね。そうすると「砂糖は甘いからふく
 らむんじゃないかと思った」とか答えると思うのね。
 「わはは、おもしろいねえ」と。そうすると、そこで

どもの思想が貧困になるのは、当たり前ですよ。

戦争は餓鬼のするハコ

奥地 無着さんは平和こそ大事と強調されています
 が、戦前からいろいろな経験がされてこられて、いま、
 平和についてどう思われていますか。

無着 地球を壊すのは、ヒトだけです。戦争というの
 は、地球を壊すんですよ。ヒト以外の動物は戦争をし
 ません。ゴリラだって、象だって、ライオンだってね。
 そりゃケンカはしますよ。でも、武器は持たない。武
 器を持つのはヒトだけです。畜生という言葉がありま
 すが、自分は何もつくりたくないけれども、大自然がつくっ
 てくれたものをいただいて生きているものを畜生と言
 うんです。ですから、畜生は中立なんです。ところが、
 武器を持ったとき、ヒトは畜生以下の餓鬼になっちゃ
 うんですね。仏教で言うところの餓鬼です。

奥地 餓鬼は畜生よりも下なんですな。

初めて水に溶けるとは何かということが問題になっ
 てる。水に溶けるといのは、いったい何なのか。溶
 けるというのは、塩も水に溶けるし、砂糖も水に溶け
 る。じゃあ、デンプンはどうか、粉石けんはどうか。
 だから、ナメクジを10匹くらい捕まえてきて、砂糖か
 けてみたり、塩かけてみたり、実験してみたいと思
 うの。いろんな粉を振りかけてみて、どうなるかを
 見てみる。ナメクジにとっては迷惑だけどね(笑)。
 人間の考える豊かさをつくるために、ナメクジに犠牲
 になってもらう。そういう教育がないんですよ、日本
 には。

奥地 そうですね。私らの時代には、わりとそういう
 授業を勝手にやっていたんですけどね。いま、そうい
 う授業をする先生は減りました。たぶん、仕組みとし
 てできないんですよ。教えなきゃいけないことも増
 えています。

無着 そもそもナメクジを見たこともなければ、塩を
 振りかけたこともない子どももいるからね。日本の子

無着 餓鬼は欲ばりで、人を助けることができない。
 人が餓鬼になったときに、戦争が始まるんです。だか
 ら、戦争というのは餓鬼がやるもので、人がやるもの
 ではないんです。畜生は奪い合いはするけど戦争はし
 ない。奪い合っても、あまつたら、ほかにあげちゃ
 うんです。

我々は、畜生として生まれるんです。すべての生物
 は畜生として生まれる。犬、サル、猫、虎、人、ぜん
 ぶ同じレベルで畜生です。ですから、赤ちゃんや子ど
 もには人格はないんです。赤ちゃんや子どもは、人
 あって畜生です。

人格というのは、自分以外の人を楽にさせることが
 できたときに初めて、「格」ができるんです。あるいは、
 「働く」というのは、「はたのひとを楽にさせる」こと
 だと言います。かたわらの人を楽にさせることを働く
 という。それが人格の形成ということですよ。

しかし、世界中で人格のレベルが落ちていきますね。
 地球をいったん、しつちやかめつちやかにするところ
 を見てから俺が死ぬか、俺が死んでからそうなるのか

わかりませんが、このままいったら、そうならざるを得ない状況にあると思います。

奥地 それでも、できるだけそうしない方法はあるでしょうか。

欲ばらず、本当のことを

無着 欲ばらないことですよ。資本主義社会が、どういふかたちで終わりになるかわからないけどね。いまや円やドルを指先でピッピッと動かす世界になつてきているでしょう。俺にはわからない世界だからね。俺は店に行つて現金で買うことしかないんだよ（笑）。たいへんな時代に、人類は差しかかっている。逆に言えば、人類は大変な時代をつくり出していると言つてもいいでしょうね。人類は世界中の畜生を痛めつけている。

奥地 教育は、そういう本当の意味の平和に貢献できるでしょうか。

ますが、そのころには俺はもういないからね（笑）。だからと言つてはおかしいのですが、この『おっぱい教育論』を私の遺言書として残しておこうと思つたのです（笑）。日本の学校教育が、ヒトという哺乳動物、つまり畜生が傍（かたわら・はた）の人を楽にさせることで格が上がるのだという教育をしなければ、ヒトが餓鬼になつて地球をダメにしてしまうのではないかと、まあ、よけいなと言われるかもしれない心配をしているわけです（笑）。

奥地 どうか、お元気でお過ごしください。今日はたいへん長時間、2時間以上、お話しいただきまして、ありがとうございます。

無着 貢献しようと思えば、教育は貢献できますよ。

そのためには、本当のことを教えることですよ。いま教えていることも本当のことの一部かもしれないけれども、それは一部の富裕層が利用するために、その部分だけ教えているわけです。

たとえば、水は高いほうから低いほうに流れるというの、本当のことです。そこで、水をせき止めてダムを造るといふのも、人がやったことでね、ダムを造ることによつて、大変な利益を得るけれども、そのことによつて、困ることもあるわけです。そういうことを考えていくと、なぜアメリカでも日本でも、一握りの富裕層と言われる人、権力者どもに富が集中するのかという大問題が出てくるでしょうね。

奥地 もう、世界的にそういう構造になっていますからね。

無着 だから、資本主義つて何なのかといふところまでいくでしょう。まあ、たいへんな時代になると思



『おっぱい教育論』
無着成恭／どう出版 2016

本プロジェクトは寄付で運営し、すべての記事を無償で公開しています。
ご寄付のほど、よろしくお願いします。

郵便振替口座：00100-6-22077

加入者名：全国不登校新聞社

一口 1000 円 / 3000 円 / 5000 円

不登校 50 年証言プロジェクト <http://futoko50.sblo.jp>

#12 無着成恭さん

インタビュー日時：2016 年 10 月 30 日

場 所：無着さんご自宅マンションの共同図書室（大分県別府市）

聞き手：奥地圭子、まとめ：奥地圭子

写真撮影：木村砂織

記事公開日：2017 年 2 月 23 日

編集・発行：全国不登校新聞社

© 2017 Zenkoku Futoko Shimbun sha

東京編集局（関東チーム事務局）

〒114-0021 東京都北区岸町 1-9-19

TEL:03-5963-5526 / FAX:03-5963-5527

E-mail:tokyo@futoko.org

大阪通信局（関西チーム事務局）

TEL:050-5883-0462

E-mail:osaka_c@futoko.org

◇本プロジェクトにおける用語の取り扱いについて
「不登校」を意味する用語は、長い年月のあいだに「学校恐怖症 (school phobia)」「登校拒否 (school refusal)」「学校嫌い」「不登校」など、さまざまな用語が使われてきました。立場や人によって、その言葉の使い方や、意味するところが異なります。不登校 50 年証言プロジェクトでは、統一した用語に整理するのではなく、話し手の文脈に即して使うこととします。